第３章　史跡の概要

３－１　史跡指定の状況

①　種別	特別史跡
②　名称	安土城跡
③　所在地	滋賀県近江八幡市安土町下豊浦・滋賀県東近江市南須田町ほか
④　指定種別	年月日及び告示番号： 大正 15 年 10 月 20 日　史蹟指定　内務省告示第 158 号 昭和 27 年 3 月 29 日　　特別史跡指定
⑤　指定理由	指定基準：史二 説明：安土城跡は中世から近世への変革期に当たる戦国時代、武力により天下統一を目前にした織田信長が、統一後の政権をも目論んでその拠点とした城で、壮大な天守閣をもち、石垣を多用した平山城であり、近世型城郭の先駆となるものとして、貴重な遺跡である。
⑥　指定地域	別図（特別史跡安土城跡指定範囲）のとおり
⑦　指定地面積	９５６，６２８㎡
⑧　指定地番	官報告示のとおり（参照：保存管理計画 P.20）
⑨　管理団体	名称：滋賀県 指定年月日：昭和 3 年 2 月 9 日
⑩　土地所有状況	安土山の山地部は宗教法人摠見寺の所有。南面および搦手口山裾部は、公有地（県・市）、民有地。北部の山麓部分は民有地。

図 3-1　特別史跡指定範囲

図 3-2　安土城跡赤色立体地図

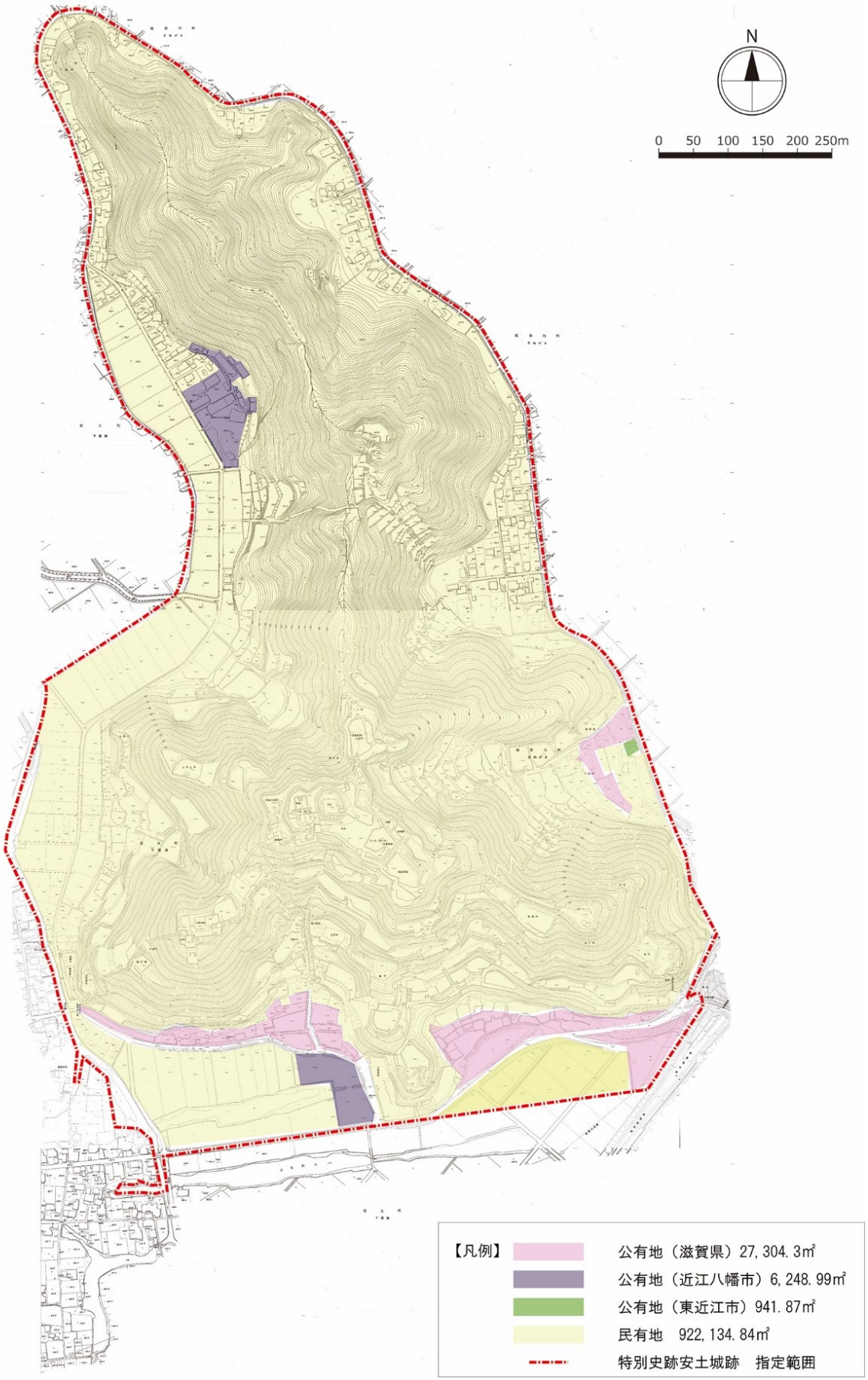
N
0 50 100 150 200 250m
【凡例】
公有地（滋賀県）27,304.3㎡
公有地（近江八幡市）6,248.99㎡
公有地（東近江市）941.87㎡
民有地　922,134.84㎡
特別史跡安土城跡　指定範囲

図 3-3　土地所有区分

３－２　史跡の概要

（１）安土城の歴史

①　築城以前

安土山周辺の歴史は縄文時代までさかのぼることができる。山の周囲から縄文時代の遺物が発見されているほか､山の西側には縄文時代の集落遺跡である弁天島遺跡が存在する。

弥生時代にも人々の生活の痕跡は存在する。安土山の北に広がる大中の湖の南の砂州からは、弥生時代中期の水田跡が発見され、大中の湖南遺跡として史跡に指定されている。

古墳時代の遺跡としては安土山自体にも古墳が存在する。また、安土山から尾根続きにつながる繖山の支尾根上に県内最大級の前方後円墳である史跡瓢箪山古墳が存在する。

古代においても大中の湖南遺跡に隣接する芦刈遺跡からは石組突堤が発見され、琵琶湖水運との関わりが考えられる。

中世になると安土山の周囲にいくつかの荘園が認められる。特に、山の南西部には大和国薬師寺領豊浦荘が広がり、安土城下町の前提となる集落が存在したことが確認できる。

豊浦荘は天平感宝元年（749）に聖武天皇の勅願によって薬師寺に施入されたもので、その範囲はおよそ現在の近江八幡市安土町下豊浦・上豊浦に一致する。荘内には活津彦根神社や新宮神社など現存する神社があったことが史料に見られる。

安土山の西に広がる西の湖の南にある常楽寺湊は中世から機能していたことが確認される。八幡が港として整備される以前は、周辺地域の中核的な港として琵琶湖水運の中で重要な地位にあった。また、多くの物資や人が集まったと考えられることから、港にともなう集落の存在が想定できる。

このように、安土山周辺では古くから人々の活動があったと考えられることから、信長が安土を居城として選定するにあたり、そうした旧集落の存在が大きな要因となったであろうことは想像に難くない。

②　築城から廃城

近江は琵琶湖を中心として東西南北の陸上・水上の流通・交通の要に位置していた。信長が新たに築城の地として選んだ安土は、それまで信長の居城であった岐阜と京の中間にあり、近江国のほぼ中央、琵琶湖の東岸に位置する。東西交通の幹線である東山道が南方を通り、安土とは下街道でつながる。また東山道から八風街道や千草街道が分かれて伊勢と近江を結び、今津や海津などの湖北の港から九里半街道や七里半街道を経て小浜、敦賀といった日本海岸の港につながる。近江は伊勢湾と日本海をつなぐ南北交通の要にも位置している。また、琵琶湖岸には数多くの港が存在し、多くの人や物が湖上を行き交っていた。安土の近くには常楽寺湊があり、湖東地域の物資の琵琶湖水運との結節点となっていた。信長自身も岐阜と京との往来の途次、常楽寺を頻繁に利用している。信長は安土築城にあたって常楽寺湊を城下町に取り込んでいるが、それはこの地の利点を熟知しており、早くから築城場所として念頭においていたものと思われる。

信長が安土築城を開始するのは天正 4 年（1576）正月のことである。しかしそれ以前、元亀元年（1570）に安土城が築かれたことが『信長公記』に記されている。同年 4 月、越前攻撃中に浅井氏の離反を知った信長は急遽京へとって返す。その後岐阜へ戻る際に近江

の要所に家臣を配置しているが、中川重政を安土城にいれている。ただ、この時の安土城が安土山の城を指すかどうかは定かではない。安土山西麓の下豊浦村には安土という集落があり、あるいはそこに築かれた城を指すのかもしれない。たとえ安土山に城が築かれていたとしても信長の安土城とは異なり、合戦に備えての山城であったと思われる。

信長は、安土築城の前年には越前一向一揆を殲滅させて領国の一定度の安定を得ている。また同年、長篠の戦いで武田勝頼を破り、大坂本願寺と和睦をするなど、天正 3 年は対外的にも安定を得た年となった。また、この年の暮れには嫡子の信忠に家督を譲っている。しかし、これは信長が隠居して一線を退いたのではなく、戦国大名としての地位を信忠に譲り、自身はより上位の存在である天下人として統一事業を進めていくことを意味している。まさに安土城は天下人信長の拠点として築かれたのである。

築城にあたっては「尾・濃・勢・三・越州・若州・畿内の諸侍、京都・奈良・堺の大工・諸職人等召し寄せられ」と『信長公記』に記されているように、領国中から多くの人夫と伝統技術を持った職人を動員している。天正 5 年（1577）6 月には城下町に宛てて楽市楽座の掟書を発布しており、ほぼ同時に城下町建設が始まった様子がうかがえる。この掟書は城下町の振興を意図して出されたものであり、多くの人々が安土の町を訪れ、大いなる賑わいを見せていたことは、安土を訪れた宣教師の記録に記されている。また、遠国の戦国武将も安土を訪れていたことが様々な記録に記されている。信長は天正 10 年正月に、完成したばかりの行幸御殿を武士や町人など多くの人々に見物させており、安土を大勢の人に見せようとしていたことがうかがえる。

安土城の完成については明らかではない。そもそも何をもって完成とするのかも諸説あり、一説には未完成のまま廃城を迎えたというものもある。しかしながら、一応の区切りをあげるとすれば、天主の完成であろう。天正 7 年（1579）5 月、信長は安土城天主に移り住んでおり、この時には天主をはじめとする主郭部が完成していたと考えられる。しかしその 3 年後の天正 10 年（1582）6 月 2 日、本能寺の変を迎える。

本能寺の変で信長は世を去ったものの、安土城がそれとともに廃城になったわけではない。本能寺の変から 3 日後、6 月 5 日明智光秀が安土城に入城する。翌 6 日は朝廷から安土に勅使が派遣されているが、これは光秀の政権が承認されたことを意味している。その後、光秀は安土城に留守居として女婿の明智秀満を残し上洛する。そして、毛利攻めより急きょ取って返した羽柴秀吉と 6 月 13 日、洛西山崎の地で戦った。敗れた光秀は落ち武者狩りにあって命を落とした。

安土城は、6 月 14 日から 15 日未明にかけて炎上する。炎上の原因については定かではない。伊勢から駆け付けた織田信雄が焼いたとするもの、城下の火災が飛び火したとするもの、留守居の明智秀満が城を出る時に焼いたとする説があるが、いずれも確かな根拠に欠ける。この時、信雄は安土には来ておらず、また城下と炎上した主郭部とを結ぶ百々橋道からは炎上の痕跡が見つかっていないことから、前の二説については成り立たない。秀満放火説については、当時の敗軍の作法にもかなっていることから、この中ではもっとも蓋然性の高いものといえよう。

ともかく、この時の火災で炎上したのは主郭部だけだったことが発掘調査で確認されており、山腹から山麓にかけてはまだ諸施設が焼け残っていたのである。安土城がこの時点で廃城となっていなかったことは、その後の歴史が証明している。6 月 16 日に、明智光秀を討った羽柴秀吉と織田信孝が安土城に入城し、また 12 月には信長とともに斃れた嫡男信忠の遺児三法師が安土城に入城している。翌年正月には織田信雄が入城し、安土城下に

向けて掟書を発布している。

こうした行為は、自身が信長の後継者として天下人をつぐものであることをアピールするものである。信長の仇を討った秀吉とはいえ、すぐさま天下人となれるわけではなく、いまだ織田氏の天下を象徴する城としての安土城の機能は存続していたのである。

秀吉は最初に織田信孝を滅ぼし、これと結んだ柴田勝家を天正 11 年（1583）4 月の賤ヶ岳の戦いで倒した。そして天正 12 年（1584） 3 月にはじまる小牧・長久手の戦いは織田氏の天下の幕引きとなる戦いであった。この戦いで羽柴秀吉は織田信雄と結んだ徳川家康と戦うが、両者を政治的に屈服させ、新たな天下人となる。織田氏の天下が消滅したことにより、それを象徴する安土城は必要なくなり、この時点で廃城となるのである。天正 13 年（1585）9 月、秀吉は甥の秀次に近江湖東地域において 43 万石の領地を与え、八幡山への築城を命じる。築城にあたっては、安土城下から八幡山城下へと町ぐるみ住人を移住させたことが八幡町人の記録や同名の町の存在から明らかであり、また安土城の部材が八幡山城へ移された可能性も指摘されている。

③ 廃城後の歴史

安土城が廃城となったからといって安土山がその後まったく荒廃していったわけではない。山内には信長が建立した摠見寺が残り、現在にいたるまで活動を続けている。

摠見寺が最初に史料の上に登場するのは、天正 9 年（1581）のことである。この年の盂蘭盆会で、信長は摠見寺をはじめとした城内各施設に提灯を吊るし、人々を驚かせた。天正 10 年には安土にやってきた徳川家康を接待するため、摠見寺に能舞台をこしらえている。

豊臣時代には、天正 20 年（1592）豊臣秀吉より寺領として 100 石を与えられている。その領地は蒲生郡須田村（現東近江市南須田町）にあたるが、これは明治維新まで続く。慶長 9 年（1604）には豊臣秀頼によって摠見寺の伽藍の拡張が行われ、本堂の西側に書院・庫裡が造られた。また、伝承ではあるが、天正 11 年に伝二の丸跡に信長廟が建てられた。

元和 3 年（1617）、徳川秀忠が摠見寺の寺領を 227 石に加増し、安土山の支配権を認めた。加増された 127 石は安土山の西側の蒲生郡下豊浦村（現近江八幡市安土町下豊浦）にあたる。以後、明治維新までこの寺領と安土山の支配権は変わることはない。その間、歴代住職に織田信雄の子孫の系統である丹波柏原藩主の養子を迎え、織田家との密接な関係を保ちながら信長の菩提寺としての活動を続けている。50 年ごとの遠忌供養のほか、下豊浦村の領主である仁正寺藩主市橋氏などがしばしば伝二の丸跡の信長廟への参拝に訪れており、そのため城内道の簡易な清掃や整備が行われたことが摠見寺に伝わる古文書に記されている。その後摠見寺は嘉永 7 年（1854）に火災で本堂や書院・庫裡などの主要伽藍を焼失するが、大手道上の現在地に仮本堂を移し、活動を続けている。

また、伝長谷川邸跡には織田信雄から 4 代にわたっての供養塔があるが、これは信雄の子孫の系統である大和大宇陀藩歴代藩主の供養塔である。信雄の子孫は後に丹波柏原藩主となるが、摠見寺との密接な関係からこの 4 基の供養塔が大和大宇陀から移されたと考えられる。

明治にはいると明治 4 年（1871）の上知によって寺領を失う。安土山も境内周辺を除き、国有林となる。幕末の火災で焼け残った建物も他所へ売却されたようで、現在は二王門と三重塔が残るのみである。また、裏門が東近江市南須田町の超光寺の表門として売却されたことが超光寺に伝わる古文書に書かれている。信長時代の安土山に存在した建物のうち

で現存するのが確認できるのはこの 3 棟だけである。

また、大正末から昭和初期にかけて、文筆家の徳富蘇峰が安土山を訪れている。蘇峰の代表作である『近世日本国民史』執筆にあたっての調査のためであるが、調査の枠を超えて当時の摠見寺住職と交流を持っていた。大手口・百々橋口・東門口に蘇峰自身の揮毫による「安土城址」「安土城阯」の石標が建ち、山内の伝織田信忠邸跡には安土山をうたった蘇峰の詩碑が自身の揮毫により建っているのはそうした交流によるものである。

大正 7 年（1918）、安土城跡と織田信長を顕彰することを目的として安土保勝会が設立された。国庫補助を得て石段の修理をはじめとした城跡の整備を行っている。

昭和 17 年から順次安土山の北に広がる内湖の干拓が進められ、大中の湖、安土内湖が耕地化され、伊庭内湖の一部と西の湖のみが内湖として残された。安土山の周囲は陸地となり、山麓に入植者の住宅が建設され、今にいたっている。

（２）廃城後の環境の変化

① 江戸期の環境

安土山周辺は、図 3-4 近江国蒲生郡安土古城図（滋賀摠見寺蔵，江戸中期）には安土山の東西北の三方に内湖、南に沼（堀）が位置し、図 3-11 近江名所図会（1814）には、遠景に帆掛船が描かれており、舟運があったことがわかる。これらについては、築城当時から大きな変化はないと思われる。また、主に天保期（1830～1844）には、内湖の一部が干拓され、新田開発された記録がある（図 3-5）※2。

安土山については、図 3-4、図 3-11 には、ともに摠見寺境内、安土城石垣、織田家及び信長の墓などが見られる。植生は、ともにアカマツ林が主であるが、図 3-4 には天主の南や摠見寺付近には竹林が描かれ、図 3-11 にはアカマツ林は尾根付近に多く、斜面地は裸地や草地として描かれている。摠見寺の石垣や階段、周辺の山道がはっきりと描かれていることから、安土山の山内の見通しはよく、安土山周辺からこれらの建造物への眺めも良かったものと思われる。

※2 近江八幡の歴史 第 7 巻（平成 29 年）88 頁

② 明治・大正期の環境

安土山周辺は、図 3-5 正式二万分一地形図「能登川」（1893）には、安土城跡に隣接して内湖や堀が位置し、江戸期から大きな変化はない。平地部はほぼ全域が水田で、上豊浦と下豊浦の集落付近には桑畑が見られるが、いずれも江戸期と変わらないものと思われる。

安土山については、図 3-12 名蹟図誌近江宝鑑（1897）には、1854 年に焼失し、伝徳川邸跡に再建された本堂（「庫裡」）の姿が描かれている。植生は、主にアカマツが全体に広がっているが、二王門や三重塔が残る摠見寺旧境内や再建された本堂の周辺には、スギ・ヒノキらしき針葉樹が描かれている。図 3-8 滋賀縣寫真帖（1910）の写真には、上豊浦の集落から見た安土山が撮影されており、稜線左に二王門の屋根と三重塔の上半分が見えている。植生は、概ねアカマツ主体の樹林に覆われているが、大手道のある谷部には竹林が見られる。樹林の鬱閉度は余り高くなく、一部に草地が見られ、山道も確認できる。当時、湖東の山地には禿げ山が多く砂防事業が盛んであった状況を考えると、安土山の植生は保全されていたものと考えられる。

③ 昭和前期の環境

安土山周辺は、図 3-9、図 3-10 湖国聚英（1928・1936）を見ると、明治期から大きな変化はない。

湖国聚英は、滋賀県が観光の興隆を目的として、県内の名所・旧跡を美麗な写真におさめた写真集であり、1926 年に史蹟に指定された安土城址は、その一つに加えられている。写真の解説文には、「こゝが城址安土城趾中尤も展望のきくところで、西より北は湖水漫々として、船の出入りみちみちて、遠浦の帰帆、漁村の夕照、浦々のいかり火と云ふ、あの信長記の叙景か依然として眼界に映じてくる、裏道の中腹に安土関係の遺物を蔵す摠見寺がある」と記載されており、天主跡から見られる眺望が特筆されている。安土山の植生は、アカマツ主体の樹林であり、周辺の山々と比較すると緑量が豊かに見える。

④ 昭和後期の環境

安土山周辺は、琵琶湖の内湖でもっとも早く着工された小中湖（しょうなかこ）の干拓で一変した。図 3-6 航空写真（1961）には、安土内湖、伊庭内湖が干拓されて、安土山周辺に平坦で広大な農地が広がっている。干拓は 1942 年から 1947 年に行われ、その範囲は、小中湖のうちの安土内湖、伊庭内湖であり、西ノ湖が残された。小中湖の北に位置する大中湖は 1957 年より干拓事業が開始され、1967 年の入植で完了した。なお、重要文化的景観「伊庭内湖の農村景観」（2018 指選定）は、大中湖の一部である。

安土山の植生は、図 2-3 現存植生図（1983）では、ほとんどがモチツツジーアカマツ群落に区分され、搦手口のある谷部のみ針葉樹の植林地に区分されている。隣接する観音寺山を含む湖東の山地の植生は同様であったが、昭和 50 年頃から平成 15 年頃までマツノザイセンチュウ病による松枯れが猛威を振るい、アカマツ林は激減している。

⑤ 平成期の環境

安土山周辺は、図 3-7 航空写真（2011）と図 3-6 航空写真（1961）は、ほとんど同様であり、土地利用の変化は見られない。

安土山の植生は、図 2-4 現存植生図 1/2.5 万（2012）では、アカマツ林に代わりスギ・ヒノキ人工林が主となっており、北部の尾根にモチツツジーアカマツ群落が残存している。谷部には、アカマツ林から遷移したと考えられるアベマキーコナラ群落や竹林が分布している。山麓部南面にはシイ・カシ類の大径木があり、一時ナラ枯れ（カシノナガキクイムシが媒介するナラ菌による枯れ）が目立つ時期があったが、県内ではピークを過ぎ、計画地でもほぼ終息している。

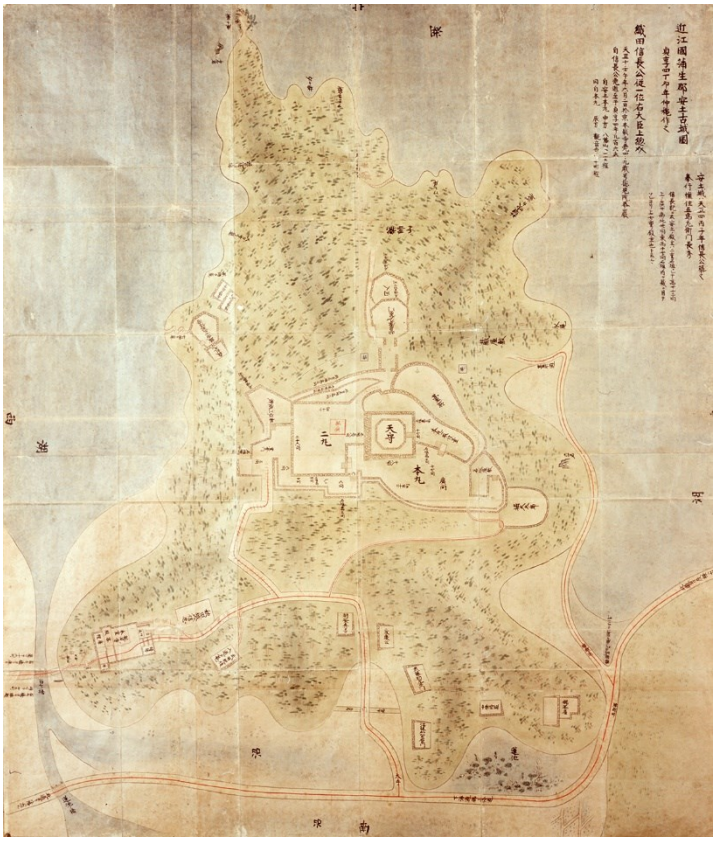

図 3-4　近江国蒲生郡安土古城図　（江戸中期 滋賀摠見寺蔵）

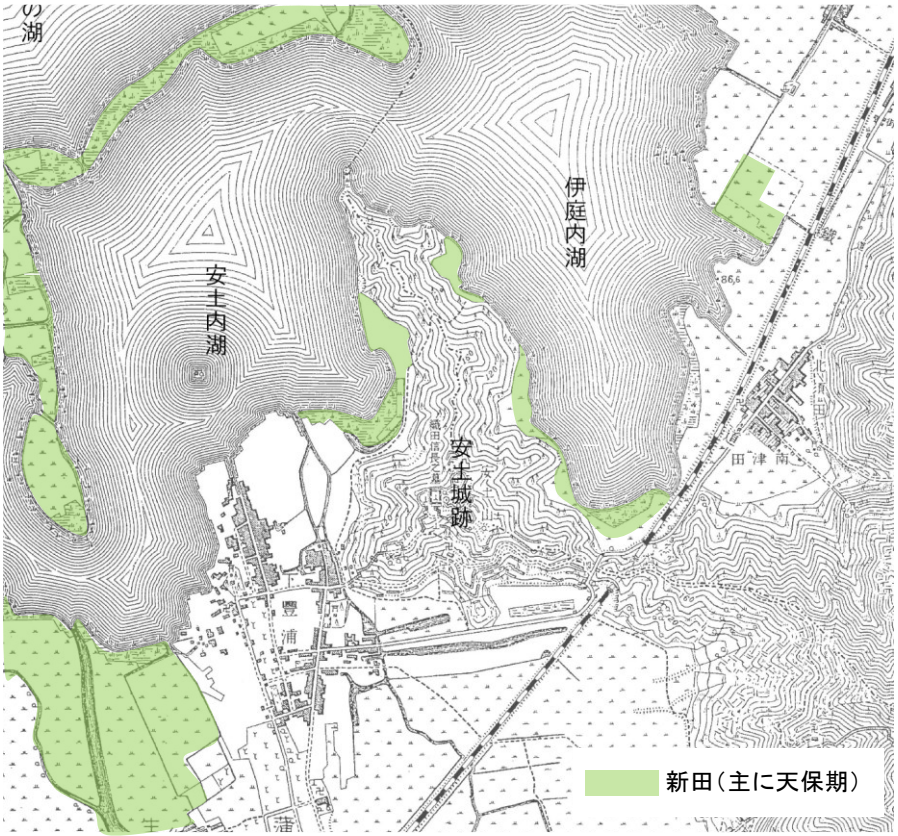

図 3-5　正式二万分一地形図「能登川」（測量年 1893）に加筆

図 3-6 航空写真（1961） 出典：国土地理院ウェブサイト

図 3-7 航空写真（2011） 出典：国土地理院ウェブサイト

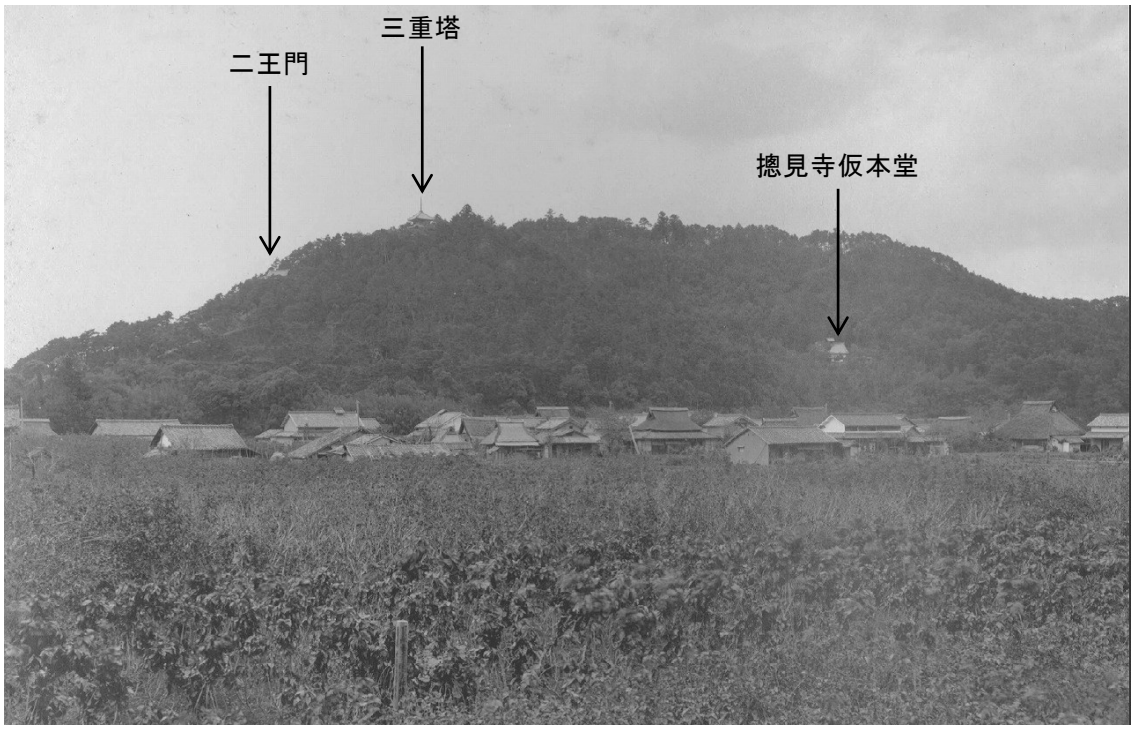

図 3-8 滋賀縣寫真帖 箱入・ 折本（乾･坤）※ 安土山（1910）

※滋賀県写真帖･製本の未掲載写真含む

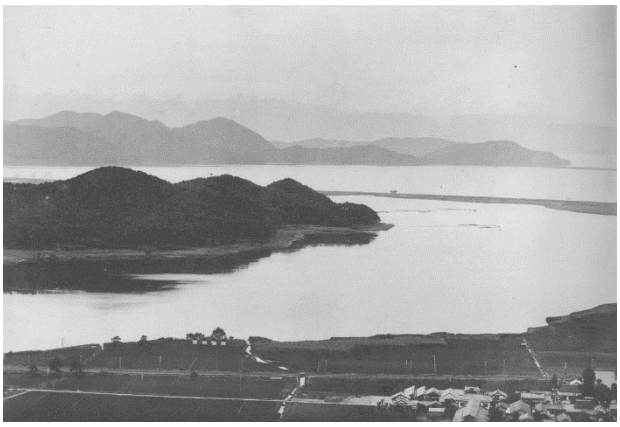

図 3-9 湖国聚英 安土遠望（1928）

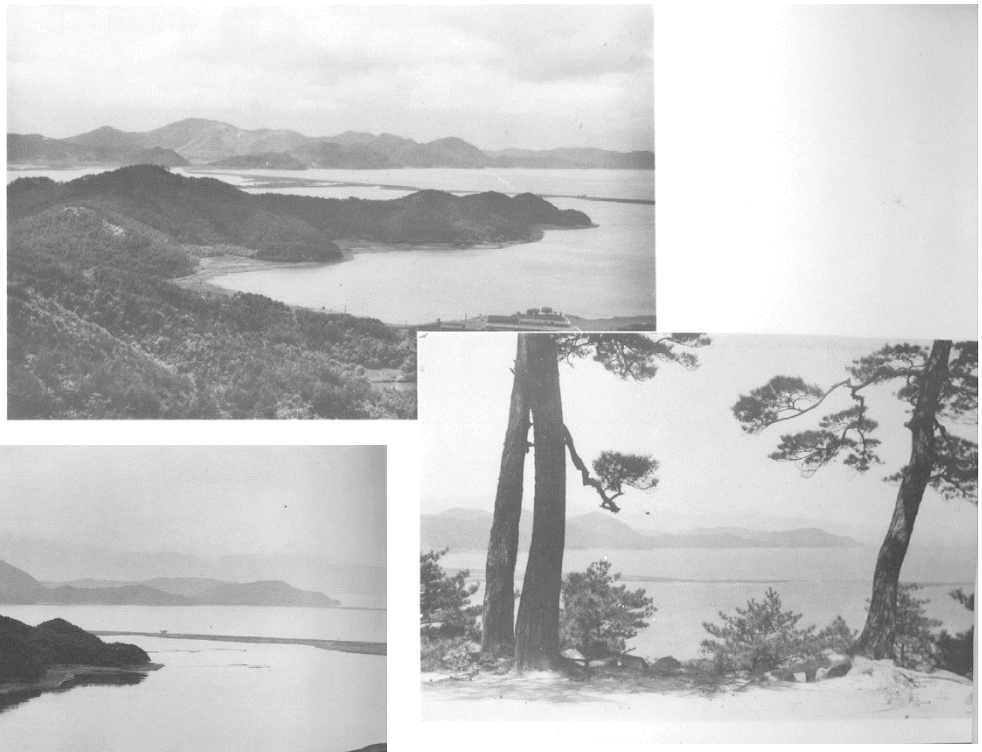

図 3-10 湖国聚英･再版 安土（1936）

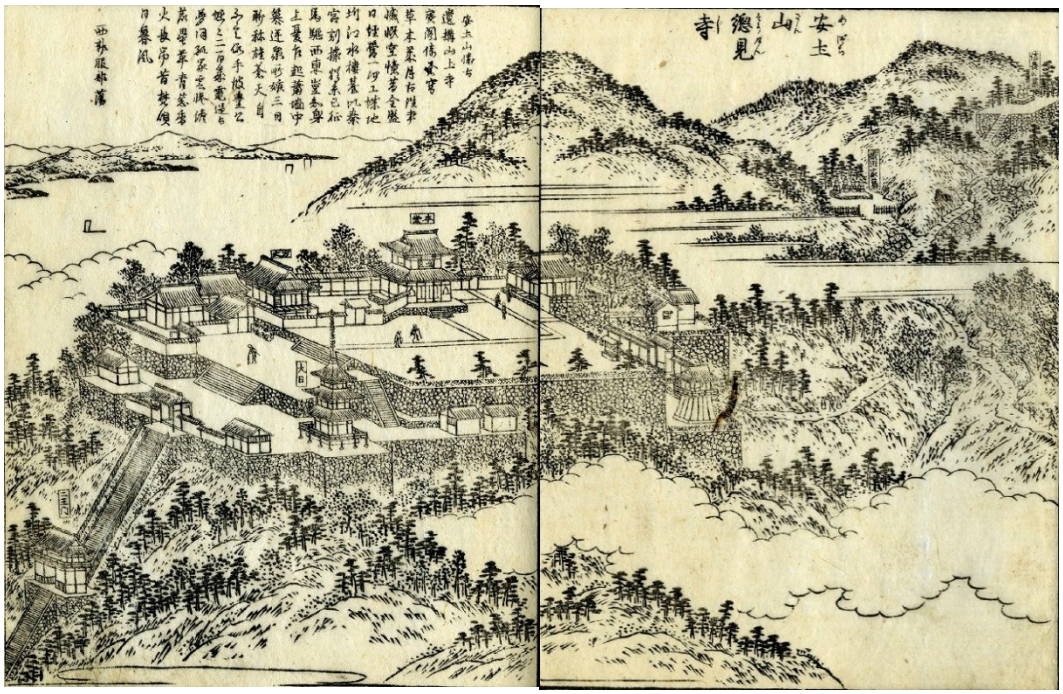

図 3-11　近江名所図会･安土山摠見寺（1814）

図 3-12　名蹟図誌近江宝鑑　安土山及摠見寺之景（1897）

（３）これまでの発掘調査の概要

① 昭和 15～16 年度の発掘調査

滋賀県が、安土城跡最初の学術的な発掘調査を実施した。調査対象は天主台・伝本丸跡である。天主・伝本丸建物の礎石を検出し、金箔瓦をはじめとする遺物が発見された。

② 昭和 35～50 年度の発掘調査

滋賀県が、安土城跡の主郭部の石垣修理事業を実施した。昭和 37 年度には、崩落土石の整理をした際に、伝二の丸帯郭から門の礎石を検出した。

③ 平成元～18 年度の発掘調査

滋賀県教育委員会が、特別史跡安土城跡調査・整備事業を実施した。発掘調査は、大手道・百々橋道・搦手道の 3 本の城内外を結ぶ道と道沿いの郭群、主郭周辺部、安土山南面部を対象として行われた。

大手道では､築城当時のものと考えられる道が検出され､そのルートが明らかとなった。大手道登り口の東西に位置する伝羽柴秀吉邸跡・伝前田利家邸跡からは建物礎石が検出された。伝羽柴秀吉邸跡では、すべての建物構成が明らかにされ、安土城内に存在した城郭建物の具体的な様相を知る手掛かりが得られた。

主郭部では、伝二の丸東溜りより火を受けた礎石と、礎石の上に建つ焼け焦げた柱の痕跡や仕切りの壁が発見された。主郭部の炎上の様子を具体的に物語るものとして注目される。また、伝本丸建物の礎石が全て確認され、伝本丸建物の全容が明らかとなった。

南面の調査では大手口から複数の虎口が発見された。東西方向に一直線に延びる石塁上に、大手門推定地より東に一つ、西に二つの虎口が発見された。南面の多目的広場からは内堀の石垣が検出された。調査前においては、貞享 4 年（1687）作成の「近江国蒲生郡安土古城図（摠見寺蔵）」より、安土山の南面は山裾高石垣の部分まで堀が広がっていると考えられていたが、調査の結果、南面高石垣の南に展開する郭群は築城当時のもので、堀跡はもっと南に位置していたことが明らかとなった。大手口から百々橋口にかけての安土山南面山裾部からは大手西端の虎口から続く石垣が百々橋口へと延びることが確認された。

図 3-13 天主台穴蔵の発掘調査後の状況
（昭和 15 年）

図 3-14 大手西虎口の発掘
（平成 18 年）

表 3-1　発掘調査の成果概要

番号	年次		発掘調査対象地	調査概要	現状
①	昭和 15～16 年	1940・41	天主跡・伝本丸跡	天主・伝本丸御殿の礎石を検出	礎石を露出して展示
②	昭和 35～50 年	1960～75	伝二の丸帯郭	門礎石を検出	礎石を露出して展示
③	平成元年	1989	伝羽柴秀吉邸跡上段郭・大手道直線部	建物礎石を検出 築城時の大手道石段を検出	環境整備工事により建物跡を平面表示　築城時の石段を復元
④	平成 2 年	1990	伝羽柴秀吉邸櫓門跡・伝前田利家邸跡虎口・伝徳川家康邸跡・大手道直線部・大手道横道部	櫓門の礎石を検出　伝前田利家邸跡虎口奥より石塁と木樋を検出 大手道直線部から西に延びる築城時の石段を検出	環境整備工事により石塁を復元　木樋レプリカを設置　櫓門跡は平面表示 伝大手道石段を復元
⑤	平成 3 年	1991	伝前田利家邸跡・黒金門周辺	伝前田利家邸跡の建物礎石を検出	埋戻して現状復旧
⑥	平成 4 年	1992	伝武井夕庵邸跡・伝織田信忠邸跡・大手道七曲部	大手道横道部の西端から上方に向かって七曲状に進む石段を検出　伝武井夕庵邸に入る虎口を検出　夕庵邸跡より井戸跡・建物礎石・土蔵跡を検出	環境整備工事により七曲道と虎口を復元
⑦	平成 5 年	1993	大手門推定地周辺	東西方向の石塁を検出	環境整備工事により石塁を復元
⑧	平成 6 年	1994	摠見寺跡周辺	摠見寺の建物礎石を検出 下層遺構（礎石）を検出	埋戻して現状復旧
⑨	平成 7 年	1995	百々橋道・主郭南面	主郭外周路の石段を検出	埋戻して現状復旧
⑩	平成 8 年	1996	搦手道上半部・井戸郭・主郭東面	伝煙硝蔵跡から瓦集積遺構を検出 主郭外周路の石段を検出 伝米蔵跡より金箔鯱瓦を検出	埋戻して現状復旧
⑪	平成 9 年	1997	搦手道下半部・主郭北面	搦手よりスロープ状の道を検出 主郭部北虎口の石段を検出	埋戻して現状復旧
⑫	平成 10 年	1998	搦手道湖辺部・主郭西面	湖辺部より溝状遺構を検出 湖辺部より金箔瓦・木簡を検出 伝二の丸東溜より火災を受けて炭化した柱跡を検出	埋戻して現状復旧
⑬	平成 11 年	1999	主郭中心部伝本丸跡	建物礎石を検出　秀吉時代の清涼殿に復元可能　伝三の丸跡下より笏谷石製容器を検出	埋戻して現状復旧
⑭	平成 12 年	2000	主郭中心部天主跡	天主礎石を検出	埋戻して現状復旧
⑮	平成 14 年	2002	伝大手口～百々橋口	東西二ヶ処の虎口を検出	環境整備工事により虎口を復元
⑯	平成 15 年	2003	蓮池周辺西地区	雛壇状の郭と虎口を検出	埋戻して現状復旧
⑰	平成 16 年	2004	蓮池周辺東地区	雛壇状の郭と虎口を検出	埋戻して現状復旧
⑱	平成 17 年	2005	内堀跡	内堀の石垣と基礎の胴木を検出	埋戻して現状復旧
⑲	平成 18 年	2006	北腰越南面	石垣	埋戻して現状復旧

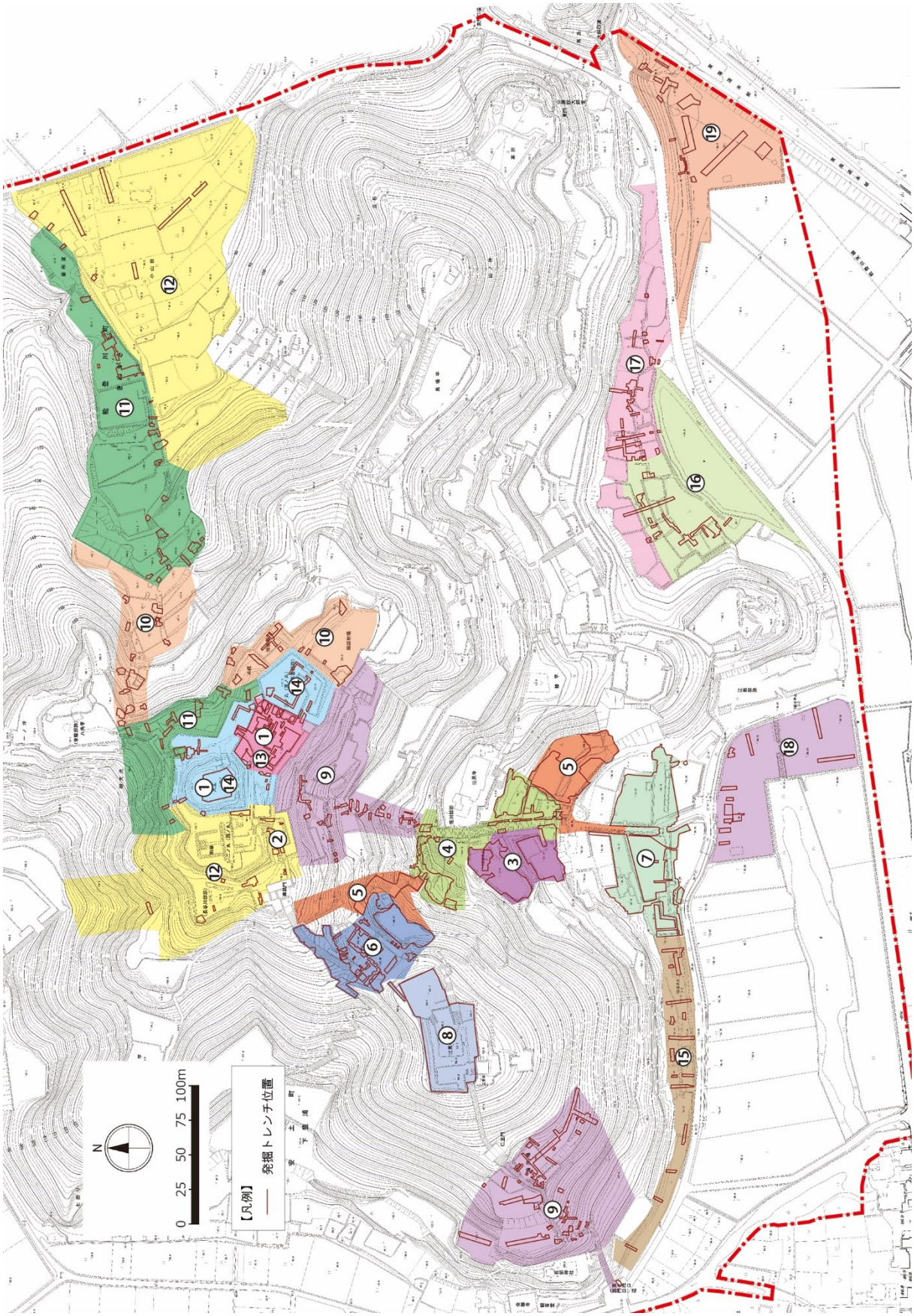

図 3-15 発掘調査位置図

（４）これまでの環境整備の概要

① 昭和 4～6 年度の整備

安土保勝会が、国庫補助を得て大手口・百々橋口・東門口の三か所に徳富蘇峰揮毫による「安土城阯」「安土城址」の標石を建立し、史跡の境界杭を設置した。伝二の丸跡の復旧工事を行い、「伝二の丸跡」の標石を設置し、石垣・石段の修理を行った。百々橋口から黒金門跡までと大手門跡から百間石垣(解体前の現摠見寺境内石垣)までの石段を修理した。また、県道から伝羽柴秀吉邸跡前にいたる伝大手道部分が内務省によって買収され、幅 4 mの道路として整備された。

② 昭和 15～16 年度の整備

天主台と伝本丸跡の発掘調査を実施したのち、天主台穴蔵と伝本丸跡の礎石群をそのまま露出展示した。また、天主台穴蔵の入口に仮設の石段を設置。穴蔵南外側には崩落防止のための仮設補強石垣を設置した。

③ 昭和 35～50 年度の石垣修理

主郭部の石垣の修理と一部の発掘調査が滋賀県により実施された。伝二の丸跡と天主台外面の石垣以外の積み直しが行われ、伝二の丸帯郭より門礎石が検出された。

図 3-16 黒金門跡石垣復元
（昭和 35 年）

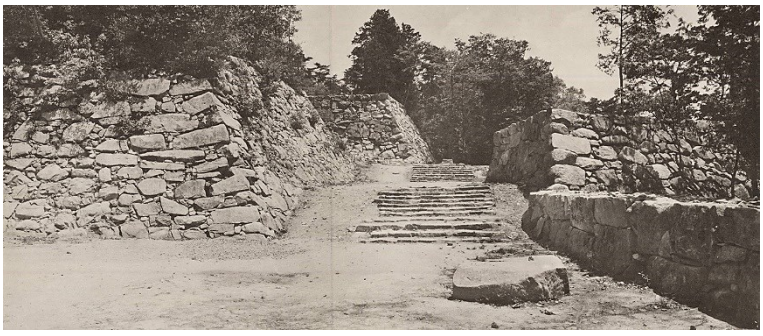

図 3-17 伝二の丸帯郭整備
（昭和 37 年）

④ 平成 4～20 年度の復元整備

滋賀県教育委員会が、特別史跡安土城跡調査・整備事業を実施した。復元整備は、大手道と南面山裾部で実施された。

大手道は主郭部の入り口である伝黒金門跡まで築城時の石段とルートが復元された。大手道沿いの郭では、伝羽柴秀吉邸跡上段・下段・櫓門跡、伝前田利家邸跡虎口周辺、伝武井夕庵邸跡虎口周辺の整備が行われ、建物の平面表示や石段の復元、石垣の修覆が行われた。

南面山裾部では大手門推定地周辺の石塁と虎口の復元、大手口から百々橋口にかけての石垣と虎口の復元が行われた。

表 3-2　環境整備の概要

番号	年次		整備地区	整備概要
①	昭和 4～6 年	1929～31	山内各所	大手口・百々橋口・東門口に「安土城址」の石標を設置　史跡の境界杭を設置　伝二の丸跡の石段・石垣を修理　百々橋口から黒金門跡までと百間石垣（解体前の現摠見寺境内石垣）までの石段を修理
②	昭和 15～16 年	1940・41	天主跡・伝本丸跡	礎石を露出して展示
③	昭和 35～50 年	1960～75	主郭部	石垣修理
④	昭和 58 年	1983	大手口～百々橋口間	大手口～百々橋間環境整備
⑤	平成 4 年	1992	伝羽柴秀吉邸櫓門跡・大手道直線部	櫓門跡平面整備・大手道の復元
⑥	平成 5 年	1993	伝羽柴秀吉邸跡上段郭・大手道直線部	上段郭の平面整備・高石垣の復元・大手道の復元
⑦	平成 6 年	1994	伝羽柴秀吉邸跡下段郭・大手道直線部	下段郭の平面整備・武者走りの復元・現摠見寺境内石垣の解体
⑧	平成 7 年	1995	大手道直線部	大手道の復元
⑨	平成 8 年	1996	大手道横道部・伝羽柴秀吉邸跡	大手道の復元・伝羽柴邸跡の平面整備
⑩	平成 9 年	1997	大手道七曲部・伝武井夕庵邸跡	大手道の復元・伝武井邸跡の平面整備
⑪	平成 10 年	1998	大手道尾根道部	大手道の復元
⑫	平成 11 年	1999	伝前田利家邸跡虎口周辺	平面整備・木樋レプリカの設置
⑬	平成 12 年	2000	伝前田利家邸跡下段部	石垣復元・平面整備
⑭	平成 13 年	2001	大手口周辺	（整備に伴う事前発掘調査）
⑮	平成 14 年	2002	大手口周辺	（整備に伴う事前発掘調査）
⑯	平成 15 年	2003	大手口周辺	（整備に伴う事前発掘調査）
⑰	平成 16 年	2004	大手口周辺東側	石塁復元・平面整備
⑱	平成 17 年	2005	大手口周辺西側	石塁復元・平面整備
⑲	平成 18 年	2006	大手口南面	石塁南面平面整備
⑳	平成 19 年	2007	大手口～百々橋口	石垣と虎口の復元
㉑	平成 26 年	2014	百々橋口道、二王門下諭所場	台風 18 号災害復旧に伴う石垣復元

図 3-18　大手口周辺西側石垣の復元
（平成 17 年）

図 3-19　大手口～百々橋口石垣の復元
（平成 19 年）

図 3-20 環境整備の実施状況

表 3-3　主郭部の環境整備の概要

年次		実施箇所	実施内容	石垣修理箇所
昭和 6 年	1931	伝二の丸跡	伝二の丸跡修理工事（標石設置、石垣・石段修理）	伝二の丸跡
昭和 15 年	1940	天主跡	石倉内部石積み・崩壊土石撤去・石倉外側仮設補強石垣設置・天主登口周囲石積み・石段復原修理・崩壊土石撤去	天主跡
昭和 35 年	1960	黒金門跡	黒金門背面崩壊石垣の修理	黒金門跡
昭和 36 年	1961	黒金門跡・伝二の丸跡	黒金門跡石垣修理・伝二の丸跡崩壊石垣等整理	黒金門跡・伝二の丸跡
昭和 37 年	1962	伝二の丸南帯郭	伝二の丸南帯郭崩落石整理及び同南帯郭塀・隅櫓石垣修理	伝二の丸南帯郭南側石垣
昭和 38 年	1963	伝二の丸南帯郭隅櫓及び郭跡・同周辺	伝二の丸南帯郭隅櫓及び郭跡石積修理ならびに同周辺整地	伝二の丸南帯郭隅櫓
				伝二の丸南帯郭塀跡
昭和 40 年	1965	伝本丸入口付近・天主付台・伝三の丸・伝本丸裏門	伝本丸入口付近の天主台崩壊石垣石の整理及び一部雑草木の除去・伝本丸周囲の天主付台・伝三の丸・裏門の一部の崩壊石整理及び崩壊石垣復旧	天主付台南側
				伝三の丸西側
				伝三の丸南側
				伝本丸裏門櫓北及び東側
昭和 41 年	1966	天主跡周辺崩壊石垣・伝本丸南側石垣	天主跡周辺崩壊石垣及び土砂の整理・伝本丸南側石垣の復旧	伝本丸南側石垣外側
				伝本丸南側石垣内側
昭和 42 年	1967	伝本丸南側・伝本丸裏門西櫓	伝本丸南側崩壊石垣・伝本丸裏門西櫓崩壊石垣の復旧	伝本丸南側石垣内部
				伝本丸南側石垣外部
				伝本丸裏門西櫓南面
				伝本丸裏門西櫓東面
昭和 43 年	1968	伝本丸裏門・天主八角平間	石垣積	伝本丸裏門西櫓西側
				伝本丸裏門西櫓北側
				伝本丸裏門西櫓東側
				伝本丸裏門西櫓南側
				伝本丸裏門東櫓西側
				伝本丸裏門東櫓南側
				天主跡・八角平間外側
				天主跡・八角平間内側
昭和 44 年	1969	伝三の丸・伝徳川邸跡	石垣積	伝三の丸外郭石垣東南隅外側南部
				伝三の丸外郭石垣東南隅外側東部
				伝三の丸外郭石垣東南部外側
				伝三の丸外郭石垣南面内側
				伝三の丸外郭石垣東面内側
				伝三の丸東南部
				伝徳川邸跡
昭和 45 年	1970	伝本丸裏門口・伝三の丸・伝本丸東北口・伝煙硝蔵入口	石垣積・崩壊土石等整理	伝本丸裏門口登坂部
				伝三の丸東南部
				伝三の丸東北部
				伝本丸東北口部
				伝煙硝蔵入口左側部
				伝煙硝蔵入口右側部
昭和 46 年	1971	天主付台・伝煙硝蔵跡	崩壊石垣積	伝煙硝蔵東側外
				伝煙硝蔵東側内
				天主付台東側
				天主付台北側

昭和 47 年	1972	天主付台	崩壊土石・雑草木除去(200 ㎡) 崩壊石垣修理(150 ㎡)	天主付台
昭和 48 年	1973	天主付台北側	崩壊石垣積・土石整理	天主付台
昭和 49 年	1974	天主付台北側	崩壊土石等整理・崩壊石垣修理	天主付台
昭和 50 年	1975	主郭部北虎口	主郭部北虎口石垣復旧・天主裏門崩壊土整理	主郭部北虎口石垣復旧

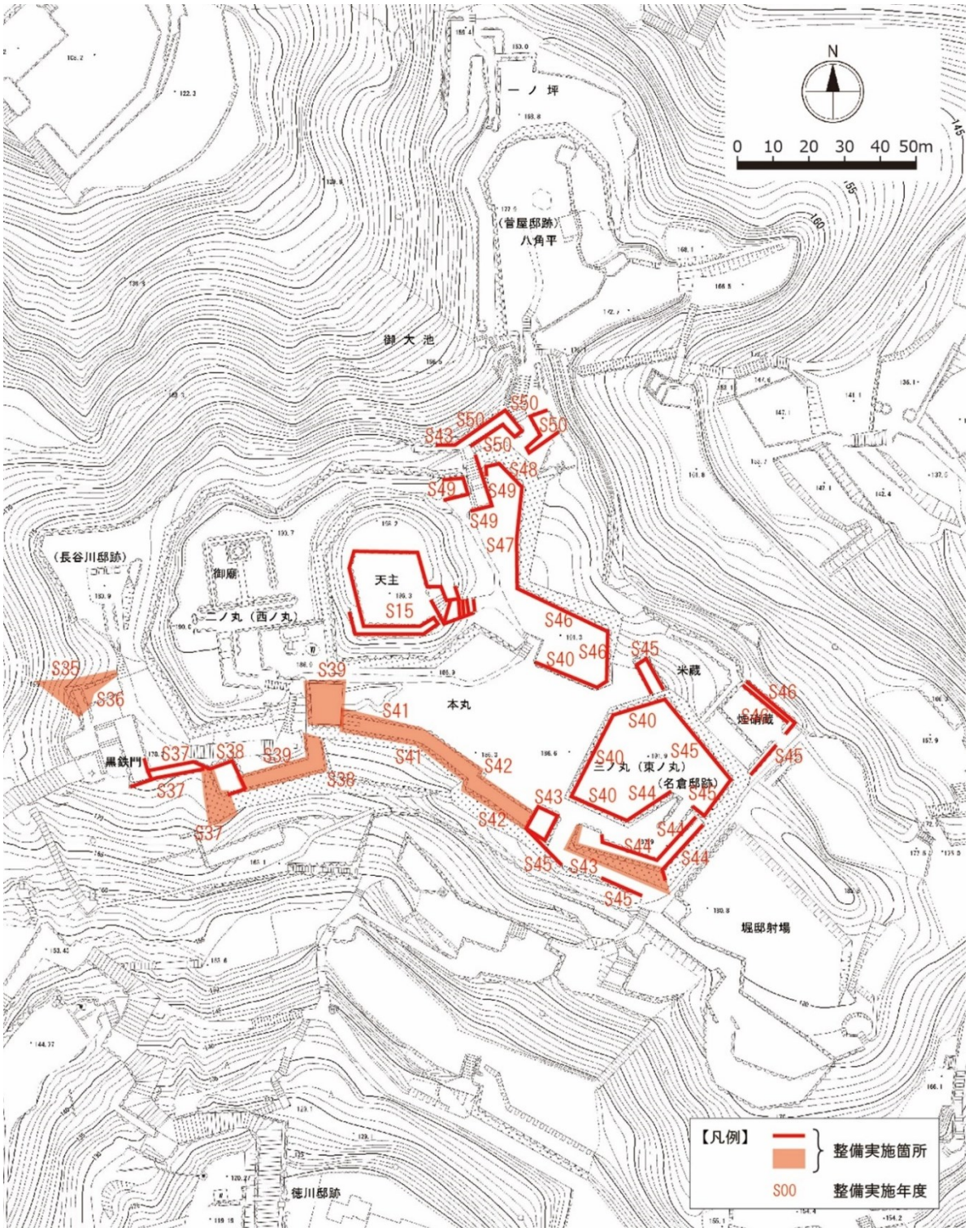

図 3-21　主郭部の環境整備の状況

（５）その他の調査

① 石垣悉皆調査

石垣の現況を把握し、石垣の保存及び活用等の施策の検討を行うための基礎資料を得ることを目的に、石垣の悉皆調査を実施した。

調査は、縮尺 1/1000 の地形図に東西南北一辺 10m のグリッドを設定し、現地踏査を実施した。現地踏査では地図に石垣の位置をプロットするとともに、石垣一面ごとに番号を付し、番号ごとに調査カードを作成した。調査カードには、石垣番号、ゾーン名（『特別史跡安土城跡整備基本構想』のゾーン名称、本書 P.12 の図参照）、地区番号（グリッドの番号）石垣部位、角の形状、石垣延長（天端・下端）、石垣高さ、石垣勾配を記し、石垣の現状について文字及び略図で記述した。また、石垣の全景と変曲点の写真を撮影し、それをカードに貼付した。

調査は、平成 6 年度から平成 11 年度の 6 ヶ年で、八角平より南の安土山南半部を対象に実施し、1847 面の石垣について、調査カード（石垣カルテ）を作成した。また、調査の成果を『特別史跡安土城跡石垣調査報告書』Ⅰ（2001 年）として刊行した。

表 3-4 石垣悉皆調査の概要

調査年度	調査対象地区	調査対象石垣No.
平成 6 年度	安土山南西部 約 93,300 ㎡	No.1～No.715 715 面
平成 7 年度	伝江藤邸跡東側 約 45,000 ㎡	No.716～No.1017 302 面
平成 8 年度	東門口周辺･主郭部東側 約 44,000 ㎡	No.1018～No.1166 149 面
平成 9 年度	主郭部･搦手道 約 44,000 ㎡	No.1167～No.1631 465 面
平成 10 年度	主郭部西側 約 44,600 ㎡	No.1632～No.1686 55 面
平成 11 年度	主郭部北西側 約 44,600 ㎡	No.1687～No.1847 161 面

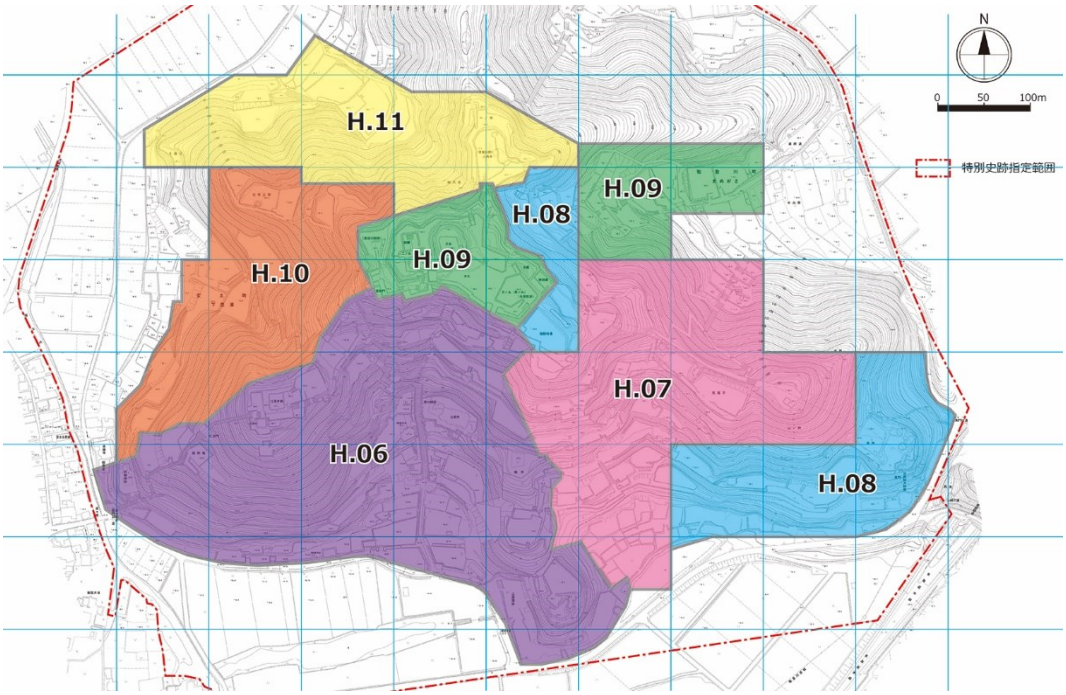

図 3-22 石垣調査実施年度

全景写真

右岸曲点

左岸曲点

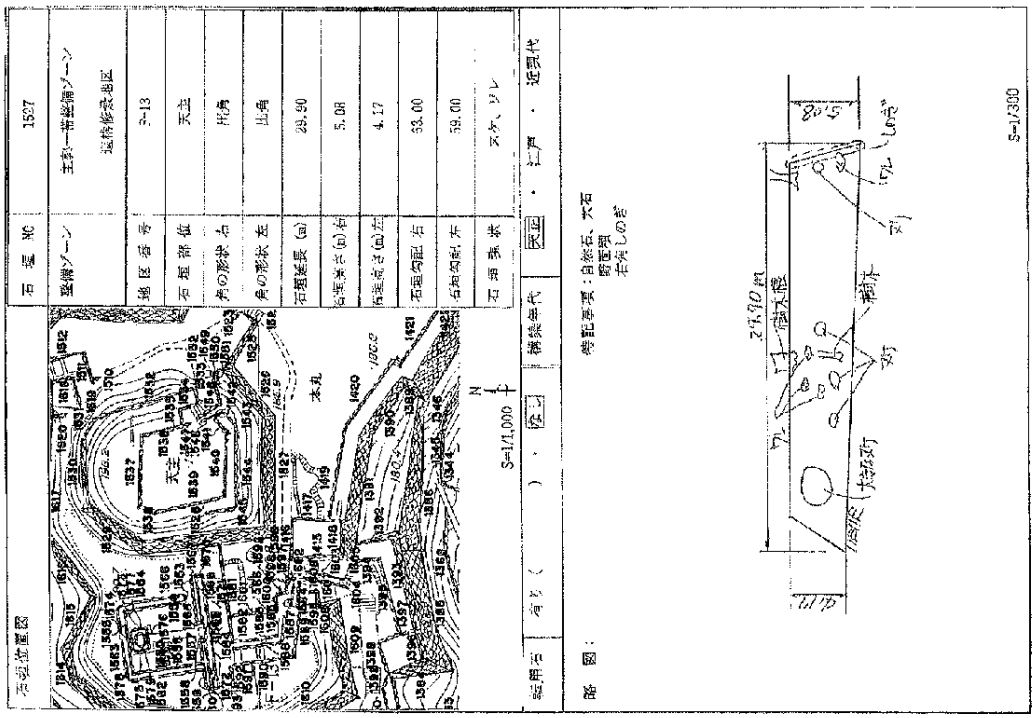

図 3-23 石垣カルテ（見本）

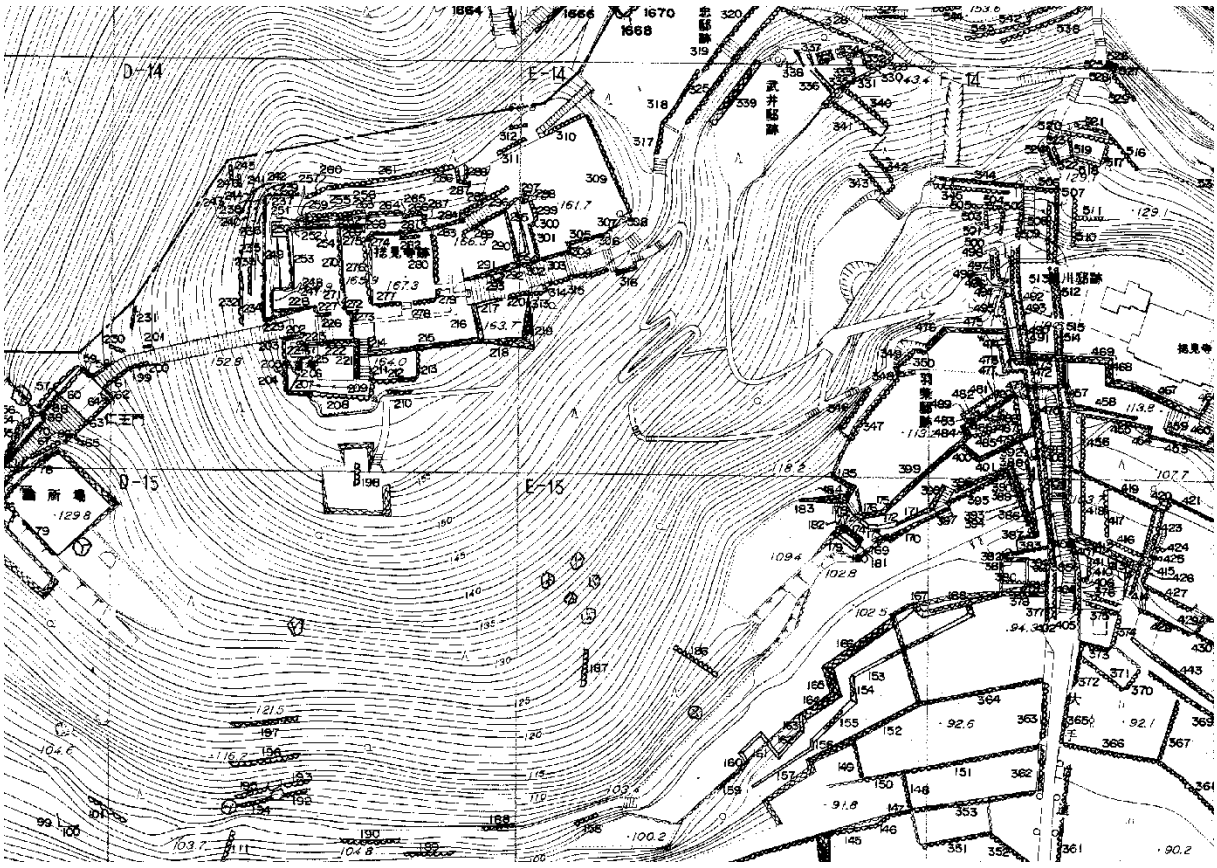

図 3-24 石垣分布図（平成 6 年度調査対象地：大手道･百々橋道）

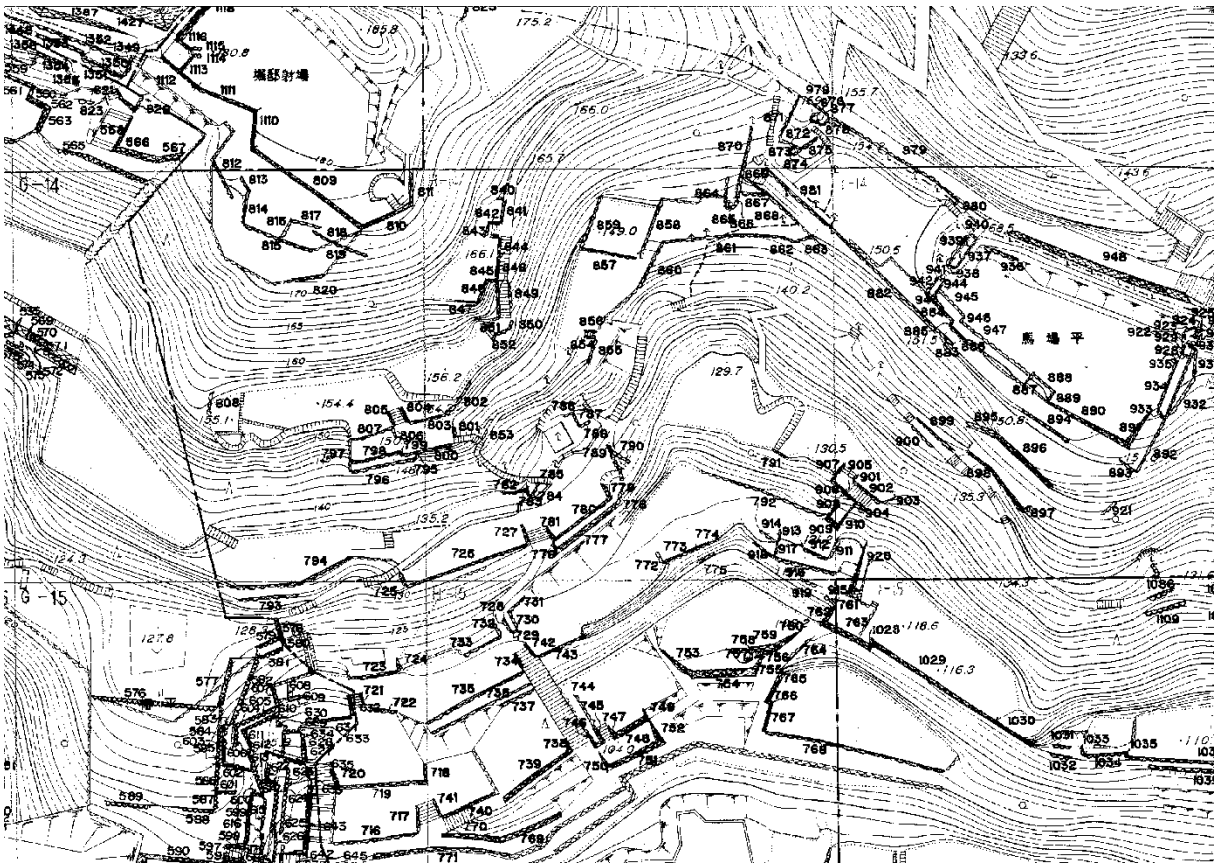

図 3-25 石垣分布図（平成 7 年度調査対象地：馬場平周辺）

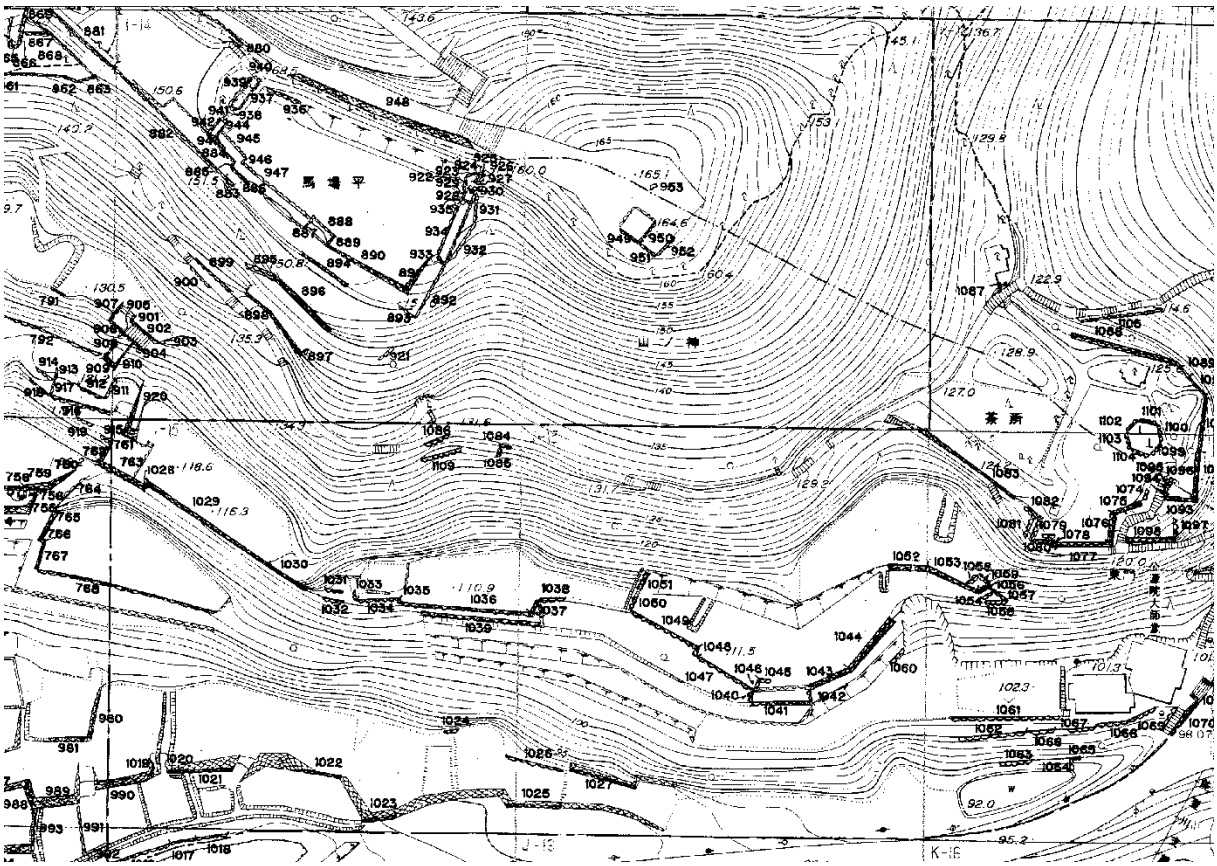

図 3-26 石垣分布図（平成 8 年度調査対象地：東門口･蓮池周辺）

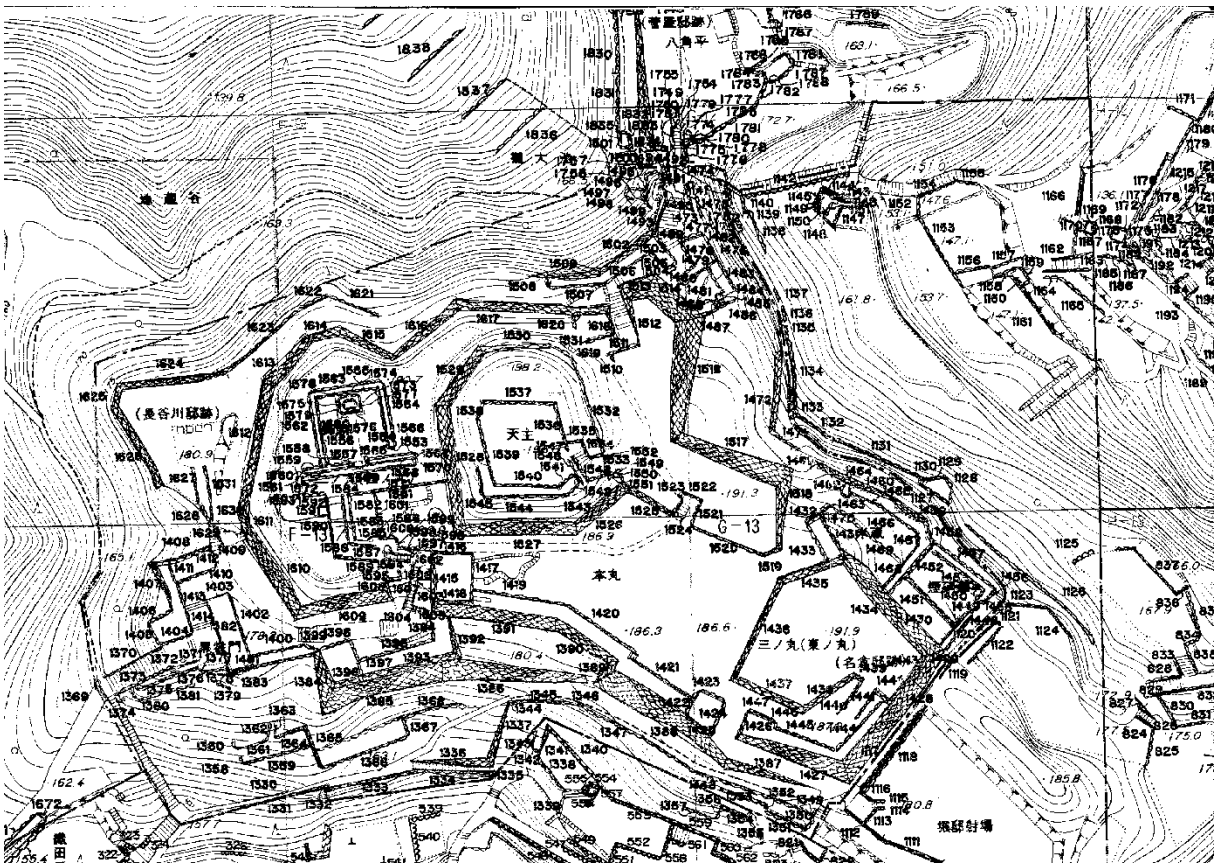

図 3-27 石垣分布図（平成 9 年度調査対象地：主郭部）

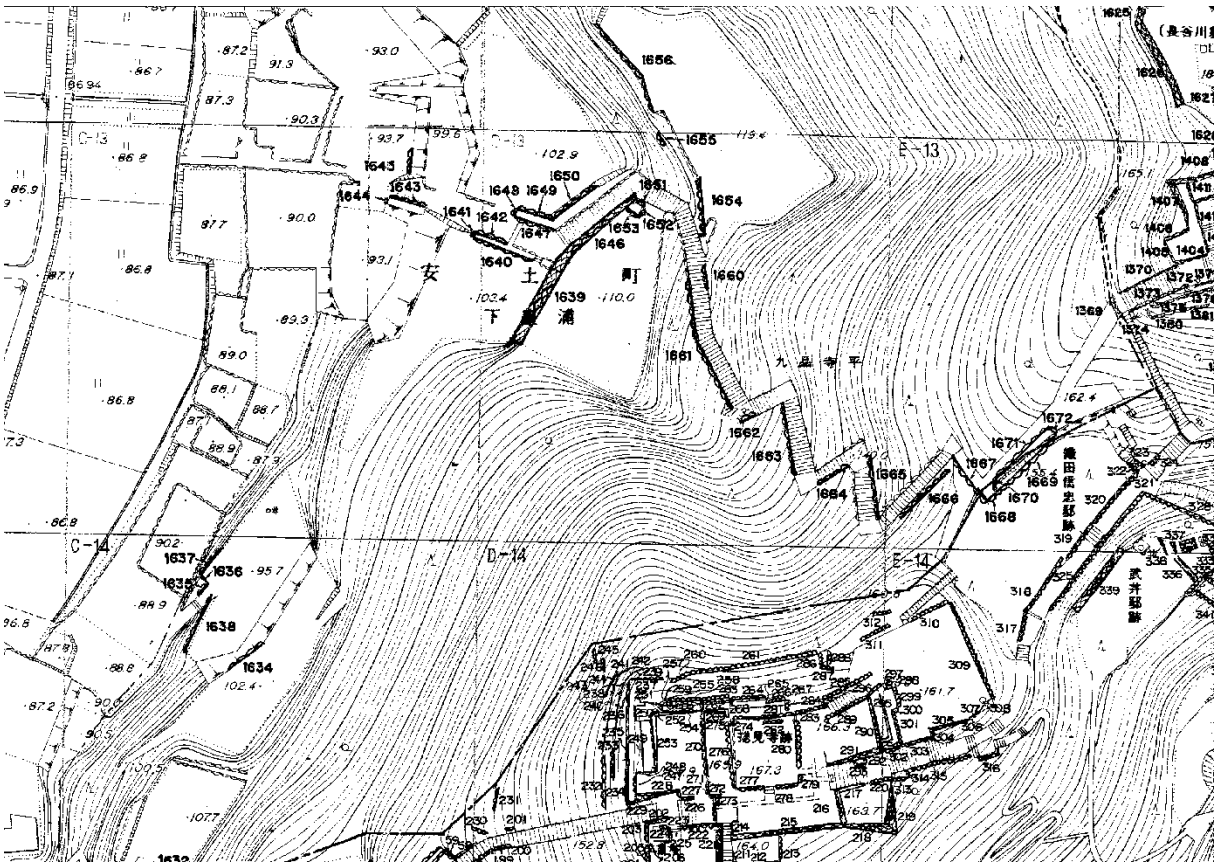

図 3-28 石垣分布図（平成 10 年度調査対象地：七曲道）

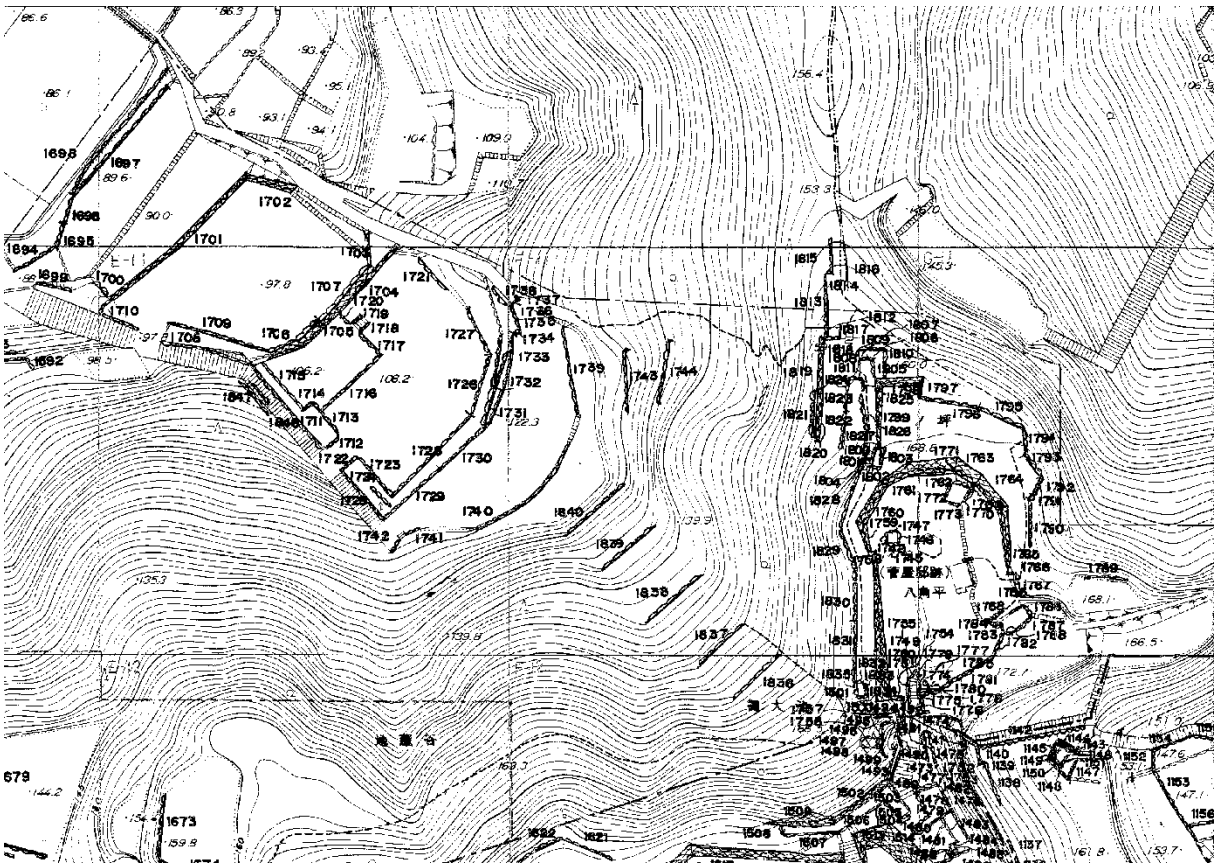

図 3-29 石垣分布図（平成 11 年度調査対象地：八角平）

（天主台）

（天主台隅角部）

（伝二の丸跡）

（伝二の丸跡隅角部）

図 3-30　築城当初のままの石垣

（黒金門跡）

（主郭部北虎口）

図 3-31　昭和に修理した石垣

② 文献調査

安土城に関する文献資料を収集することを目的に、特別史跡安土城跡周辺に残された文書群を中心に、平成 3 年度から平成 20 年度にかけて調査を実施し、毎年度報告書を刊行した。その中から、安土城に関する資料をピックアップし、『安土城資料集』1・2 として刊行した。

表 3-5 文書調査の概要

調査年度	調査対象資料
平成 3 年度	摠見寺文書 714 点（近江八幡市安土町下豊浦）
平成 4 年度	橋本左右神社文書 856 点（竜王町橋本）
平成 5 年度	東家文書 1948 点（近江八幡市安土町下豊浦）
平成 6 年度	摠見寺文書 1402 点･浄厳院文書 80 点（近江八幡市安土町慈恩寺）
平成 7 年度	東南寺文書 589 点（近江八幡市安土町上豊浦）
平成 8 年度	安楽寺文書 508 点（東近江市伊庭町）･超光寺文書 277 点（東近江市南須田町）
平成 9 年度	大野家文書 1038 点（近江八幡市安土町下豊浦）
平成 10 年度	上豊浦区有文書 2282 点（近江八幡市安土町上豊浦）
平成 11 年度	村田家文書 1698 点（近江八幡市安土町下豊浦）
平成 12 年度	西性寺文書 142 点（近江八幡市安土町常楽寺）
平成 13 年度	山本家文書 684 点（高島市安曇川町南船木）
平成 14 年度	沙沙貴神社文書 398 点（近江八幡市安土町常楽寺）
平成 15 年度	活津彦根神社文書 32 点･新宮神社文書 11 点･石部神社文書 42 点(近江八幡市安土町下豊浦)
平成 16 年度	岩倉共有文書 393 点（近江八幡市岩倉町）
平成 17 年度	観音正寺文書 226 点･教林坊文書 480 点（近江八幡市安土町石寺）
平成 18 年度	常楽寺区有文書 1679 点（近江八幡市安土町常楽寺）
平成 19 年度	石寺区有文書 33 点･光善寺文書 141 点（近江八幡市安土町石寺）
平成 20 年度	栄順寺文書 335 点･木瀬家文書 11 点（近江八幡市安土町石寺）

（６）未発掘調査地･その他の状況

① 安土山北部

安土山北部については、発掘調査が実施されていないが、現地において遺構が階段状に分布している個所が確認されていた。令和 2 年「幻の安土城」復元プロジェクトで、航空レーザー測量による詳細な地形測量図である赤色立体地図の作成を行った結果、郭跡と思われる遺構の状況が確認された。

② 安土山北部の山麓

安土山北部の山麓については、旧内湖に接していた部分であり、現状変更関連での発掘調査が行われて、内湖の痕跡や遺構・遺物が確認されているが、城跡に関わる施設の存在は確認されていない。

③ 城下町

安土城下町遺跡の発掘調査は、現在も住宅地となっていることもあり、小規模な発掘調査が行われている。下豊浦・上豊浦・常楽寺・慈恩寺・小中で城下町時代の遺構が確認されているが、溝跡やピットなど調査対象地の性格を特徴づけるような遺構は発見されていない。一部で坩堝が見つかっており、鋳造関連の施設があったことがうかがえる。